



## 紛争地域での資源開発

特定非営利活動法人 メコン・ウォッチ 秋元由紀

### 「改革」の陰で続く紛争と難民の流出

ビルマ（ミャンマー）は多民族国家で、多数派のビルマ（バマー）民族以外の少数民族が人口の約3割を占める。最近ではテインセイン大統領が主導する政治・経済改革に注目が集まっているが、実は少数民族居住地域での武力紛争による被害や人権抑圧に大きな改善は見られず、それどころか2011年3月の新政権発足後に状況が悪化した地域もある。北部のカチン州では昨年6月にカチン民族の武装勢力と国軍との内戦が再開し、7万5,000人の住民が戦禍を逃れるため住みなれた土地を離れ、避難生活を送る。また西部のラカイン州では今年6月から住民間の衝突が断続的に起き、10万人が避難していると報告されている。さらにビルマ独立直後から国軍と今年初めにカレン民族同盟と政府との停戦合意が発効してからも軍事化の解除や地雷撤去が進まず、約40万人の国内避難民が残る<sup>1</sup>。

そんな中、欧米の制裁解除に伴い、ビルマには開発のための援助や投資がどっと入ろうとしている。同国には天然資源や労働力が豊富で、資源開発を通じた経済成長の余地も大きい。しかしそうした潜在的な力が最大限に出るようになるには、様々な制度改革に加え、生産に必要な電力の供給や、原材料を運び入れ、製品を運び出すための道路や港湾設備など、インフラ整備やエネルギー開発も必要だ。問題は、天然資源や天然資源へのアクセスの多くがある紛争地域では、これまで資源開発やインフラ整備が国軍に頼りつつ周辺住民に大きな犠牲を強いた上で実施されており、その構造が今も残っていることである。

### 天然ガスパイプラインの建設

一例として、軍事政権の最大の外貨収入源であった天然ガス輸出事業を取り上げる。アングマン海にあるガス田から、ガスの買い手であるタイのラチャブリ発電所までパイプラインが建設された。途中60キロメートルほど、ビルマ南部を横断する。この地域では元々、カレンなどの少数民族

武装勢力が活動していたが、軍政は武装勢力による妨害を防ぎ、工事を安全に進めるため、建設開始に先立つ1991年から、パイプラインルートに沿って複数の軽歩兵大隊を投入した。91年以降に新しくできた国軍の基地や前哨地を結ぶ線と、パイプラインのルートはほぼ重なる。

送りこまれた国軍はまず、武装勢力の支援網を断ち切るという名目の下、パイプラインルート周辺にあった村を、監視しやすい場所に強制的に移動させた。補償金などは出ず、それどころか国軍から村に届く移住命令文書には弾丸が同封されていることもあった。また、移住のために与えられる猶予は数日間程度で、住民が生活拠点を移すのに到底不十分であった上、移住先として指定された場所にも新しい生活を支える準備は整っておらず、住民は新たに家を立て、一から生活を立て直さなければならなかった。国軍はさらに、兵舎の建設や維持、パトロールの際の荷物運搬を住民に無償でさせた。強制労働の中でも荷物運搬は殊に過酷で、歩けなくなったために射殺されたり、地雷を踏んで亡くなったりした人もいた<sup>2</sup>。

ビルマでは現在、タイ向けのもの約100倍ほどの長さのパイプラインが建設中だ。ベンガル湾から中国に陸路で石油と天然ガスを送るため、ビルマを南西から北東に横断する。パイプラインルートのうち中国国境に近いシャン州北部では、昨年3月以降、そこを活動領域とするシャンやカチンの武装勢力と国軍との戦闘がよく起きようになった。また、現地調査した人権団体が今年11月に発表した報告書によれば、シャン州北部では軍事化が進み、国軍による強制労働の使用などの人権侵害や土地の接収が起きている<sup>3</sup>。人権団体などは、かつてタイ向けパイプライン建設時に起きたことが、今また繰り返されている恐れがあると指摘している。

### バルーチャウン水力発電所

ビルマの紛争地域での資源開発には日本も深く関わってきた。ビルマ東部のカヤー（カレンニー）

州にあるブルーチャウン第2水力発電所は、日本からの戦後賠償資金で建設され、後にできた第1発電所と共に現在もビルマの主要電力供給源の一つとして稼働している。1960年の第一段階完成後も日本の援助による増強や補修が重ねられ、日本は現在も新たな補修工事を行うための準備調査を行っている。そんな経緯もあり、同発電所は日本で「日緬関係を象徴する案件」として好意的に言及されることが多い。

しかし発電所や貯水池、送電線などの建設によって周辺住民には深刻な悪影響が及んだ。カレンニーの環境団体の報告書によれば、建設工事などによってこれまでに1万以上の住民が移転させられた<sup>4</sup>。また発電所の近くで育った作家パスカル・クートウェの自伝に興味深い記述がある。クートウェの祖父は第二次大戦中に兄弟や友人とともに英国側について抗日戦に加わった。戦争で祖父は兄弟全員を亡くし、戦禍を避けるため山で暮らしていた祖父の子どもたちの半分は病気で死んだ。そして日本軍が撤退する際に町に火をつけていたので、祖父の家も焼失した。さらに祖父のその後について、クートウェはこう書く。

「最後の一撃はその後に来た。戦後、日本政府は戦時中に行った残虐行為を償うことに決めた。そして〔祖父が住んでいた町の近くに〕ダムを造った。私が子どもの頃にいつも想像していたローピタ滝の水力発電所〔ブルーチャウン発電所のこと〕に、貯めた水を送るためだった。その発電所はビルマの半分に電気を送っている。しかし町には電気は来なかった。祖父や近所の住民の水田や森林は貯水池に沈んでしまった。…昔からの狩猟・採集の場も破壊された。その代わりに、一世帯につき200チャット（約10ドル）が補償として支払われた。戦争中に同盟していた者同士が戦後に新たに結託してやらかしたことについての祖父の怒りは大変なもので、死ぬまで消えなかった。『ビルマ族〔ビルマの多数派民族〕と日本人は戦争と破壊しかもたらさない。両方とも消してしまうのが人類のためだ』」<sup>5</sup>。

周辺住民が受けた被害は、建設工事によるものにとどまらない。発電所の建設と維持には国軍の

働きも大きく関係している。発電所の周辺を含むビルマ南東部は建設当時から反政府武装勢力の活動地域で、政府はそうした勢力による発電所や関連施設への攻撃を防ぐため、周辺に複数の大隊を常駐させた。地域の軍事化によって、そこに住む人々の生活は激変した。国軍の命令により移住させられたり、無償で労働させられたりすることに加え、対人地雷による被害も深刻になった。ブルーチャウン発電所からの送電線が通るヤドウという村について、次のような記録がある。送電線を通すために使う道路の建設工事を率いた日本人技師による記述で、書かれているのは50年代後半の、道路も送電線も通る前のヤドウの様子である。

「山ばかり見てきた私たちには、わが眼を疑いたくなるほど広い田圃が一面にひらけている。悠々と遊ぶ水牛や牛の幾群れ。…時の流れが静化したかと思われる静かさ。…まさに桃源郷的な美しさと平和のただよう盆地である…食後、風に乗って夕べの讚美歌が聞こえてくる。久しぶりに私たちは人間の住む世界にたちもどってきたのだ」<sup>6</sup>

しかし送電線が通ってから、ヤドウの暮らしは一変した。武装勢力が送電を妨害しないよう、国軍が送電塔の基部に地雷を埋設したので、ヤドウなど送電線沿いの村では住民や家畜が地雷を踏んで死傷する事故が多発するようになったのだ。現在もこうした状況は変わっていない。

## おわりに

国際的には生まれ変わった国のように扱われているビルマだが、テインセイン政権が進める改革の恩恵を受けているのは主にビルマへの投資の機会を得た外国企業や国際機関、そして都市部の経済圏に属する市民で、辺境地域に暮らす少数民族住民、特に不自由な仮住まいを強いられている数十万の国内避難民にとっては、中央政府のすることが自分たちの安全につながるという意識はまだ薄い。ビルマの発展のためにはインフラ整備だけでなく、こうした人々が安心して生活できるようにするための支援も重要だろう。

<sup>1</sup> The Border Consortium, “Changing Realities, Poverty and Displacement in South East Burma/Myanmar - 2012 Survey,” November 2012.

<sup>2</sup> Earth Rights International, “Total Denial Continues: Earth Rights Abuses Along the Yadana and Yetagun Pipelines in Burma,” 2000.

<sup>3</sup> Ta’an Students and Youth Organization, “Pipeline Nightmare,” November 2012.

<sup>4</sup> カレンニー開発調査グループ、2006（日本語訳2009）、『ビルマ軍政下のダム開発～カレンニーの教訓、ブルーチャウンからサルウィンへ』。

<sup>5</sup> Pascal Khoo Thwe, “From the Land of Green Ghosts: A Burmese Odyssey,” HarperCollins, 2002.

<sup>6</sup> 伊藤博一『トンギー・ロード』岩波新書、1963。